

小学校における表情理解に着目したソーシャルスキルトレーニングの実践的研究

学校教育学専攻
学校心理学コース

M 0 8 0 3 5 J

重 富 里 弥

問題と目的

近年、子どもをとりまく状況は変化している。こうした社会の状況は、学校で起こる様々な子どもの人間関係をめぐる問題としても注目されており、それらの現象の背景にはソーシャルスキルの未熟さが考えられる(相川,1999)。しかし、近年実施されているSSTは対人関係能力の初期のスキルである表情を読み取るスキルを実施していないことから、対人関係能力を促進するためのSSEの小学生への効果は、今後さらに検証される必要がある。そのため、本研究では、小学校において表情を読み取るスキルを中心としたSSTを実践し、児童の社会的行動にどのような変化がみられるのかを検証したい。また、児童のソーシャルスキルの獲得には動機づけが関連している(藤枝,2008)といった意見もあるため、小学2年生を対象に、ソーシャルスキルと親和動機の関連を検証し、親和動機の性差についても検討する。

方法

研究1

被験者 A市立B小学校2年生5学級(男86名、女84名、170名)とする。

時期 2009年5月中旬

測定 児童用社会的スキル評定尺度(教師評定版)(磯辺ら,2006)、児童用親和動機尺度(藤枝ら,2009)、2尺度を用いる。

研究2

対象者 A市立B小学校2年生4学級とする。実践群を2学級(男子37名、女子31名計68名)とし、統制群を2学級(男子31名、女子35名、計66名)とした。

時期 2008年5・6・7・9月

実践計画日程 5月に担任教師による児童の行動の観察評価を「教師版社会的スキル尺度」(磯辺ら,2006)により収集した。プログラムを実践群にのみ実践し、実践終了1週間後、1カ月後に同テストを実施した。

結果と考察 ソーシャルスキルと親和動機の関連を検証するために、Pearsonの相関係数をもとめた。拒否不安は規律性、学業との間で低

い正の相関を示した。親和傾向は、規律性、学業との間で弱い相関を示した。このことから、集団に所属したい児童は自分の気持ちなどをコントロールすることなどを通じて、規律を守ったり教師の指示に従ったりすることが推測された。ソーシャルスキル低群は、拒否不安と社会的働きかけの間において高い相関を示した。ソーシャルスキル中群では、拒否不安と学業において弱い相関、親和傾向と規律性間で弱い相関を示した。ソーシャルスキル高群では、拒否不安と学業において正の相関を示した。このことから、ソーシャルスキル低群は、社会的な働きかけが低いほど拒否不安が高く、中・高群は拒否不安が高い児童ほど規律を守っている可能性があることが示唆された。次に、性差が親和動機の各因子へ及ぼす影響を検討する為1要因分散分析を行った。その結果、全ての因子において有意差が認められた。このことから、男子よりも女子の方が拒否不安・親和傾向ともに高いことが示唆された。親和動機の各因子の各群がソーシャルスキルへ及ぼす影響を検討するため、1要因分散分析を行った。拒否不安因子では規律性、自己コントロール、学業、親和傾向因子においては全ての因子において有意差が認められた。このことから、拒否不安が高い児童ほど自分の気持ちを上手くコントロールしながら規律を守ったり教師の指示を聞いていることが示唆された。しかし、拒否不安が低い児童は自分の気持ちを中心に行動をしていることから、学級の規律を守ることや教師の指示を聞かなくていいと思っている可能性がある。親和傾向においては、親和傾向が高い児童ほど周囲と同調していることがわかった。しかし、周囲と同調したいが為に主張できなかつたり自分の気持ちをコントロールすることができなかつたりなどの

側面がみられることが推測される。また、親和傾向が低い児童は、社会的働きかけが低く主張性も低い、自分の気持ちや考えを中心に行動している為に、自己コントロールなどの得点が高くなったのではないかと推測される。中群の児童は、自分と周囲とのバランスをうまく保っておりソーシャルスキル得点が高い結果となった。

研究2の実践結果においては、実践前と実践後1週間、実践後1カ月では児童の社会的行動にどのような変化が起きるかを検証するために、2要因分散分析を行った。その結果、時期と群において交互作用が認められた。時期においては、主効果が認められた。各因子における比較においては、学業、自己コントロール、主張性、において交互作用が認められた。時期の主効果においては、全ての項目において主効果が認められた。このような結果から、今回のプログラムでは、社会的働きかけのスキルを学ばせるものとしては短期間だったため、効果がなかったのではないかと推測される。しかし、学業のスキル、自己コントロールのスキル、主張性のスキル、規律性のスキルにおいては、何らかの効果があつたことから、効果のあるスキルだったのではないかと推測された。しかし、般化の効果では、規律性のスキル以外のスキルでは何らかの効果がなかつたことから、小学2年生の児童には般化の効果があつたとはいえない。そのため、今後の課題として、このプログラムに般化の効果がある取り組みをする必要があるのではないかと推測される。

主任指導教員 浅川 潔司

指導教員 松本 剛